

# 言語上の自己中心と幼稚園に於ける社會感情

—— ケーテ・シュテルン ——

文學士 多 田 鐵 雄 譯

(これは獨逸モンテソリー協會から「現代に即した教育」なる標題で一九三二年に刊行された單行本中の一リポートである。ケーテ・シュテルンと云ふ人に就いてはドクトル、フイロゾフィーで現にプレスラウで活動してゐる女性と云ふ以外に悉しいことを知り得ぬが、このリポートは、昨今兒童心理學界で注目的となつたピアジェの主張に基いての一考察であるところから之を譯出して見る氣になつたものである。なほピアジェに就いては、波多野氏が兒童心理學なる著書で講述してゐるし、丸山氏の幼兒の心理に於ても言及されてゐる。)

ピアジェは言語上の自己中心なる概念を彼の著書「幼兒の言語と思考」中に於て打ち樹てゐる。彼は六年未滿の幼兒の言語表現が意思傳達に必ずしも役立つてゐることは限らないこと、云ひ換へれば幼兒の言語表現の大部分は會話の相手に意思を通ずるべく何等役立つてゐないことを發見した。ミ云ふのは、返答に重きを置かず、獨り言の一種として口にされるやうな言語表現が在るミ云ふことである。か

ゝる獨り言をピアジェは自己中心的表現と名付けて、それミ、或る相手に向けられた處の表現ミを相對立させてゐる。ピアジェに據れば、この後者は「社會に對して向けられた表現」に屬するもので、彼はそれを「*langage socialisé*」と命名してゐる。又自己中心的表現に屬するものミしては、既に誰も知る處のあの幼兒の今し方聞いた許りの言葉の反復、(幼兒は外の色々の玩具を弄ぶやうにこれを弄ぶ)。

及び普通の獨り言、及び Kollektiv-Monolog (集團的獨り言)の三つを擧げてゐる。普通の獨り言をもちがつて、幼兒はこの集團的獨り言で、或る一つの集團に向つて物語るのだが、その際幼兒に取つては誰かゝ聽かうが、誰かゝ答へやうがは無關心である。この場合幼兒はその社會(集團)を意識してゐるが、その或る特定の聽取者に對してその言葉を切出してゐるのではない。その言葉は了解されて欲しいやうな個人的な報告をも又、何等かの作用の惹起することをも目的としては居ない。

言語上の自己中心と云ふことはエゴイズムとは何等關係はない。又例へば幼兒が自己の行爲を比較して或る相手の行爲を批判して非難する場合でも、かゝる往々は非社會的に響く表現でも、自己中心的表現として數ふべきではなく、むしろ社會的、即ち「社會に對して向けられた表現」として數へらるべきことを決定的に強調してゐる。論争——これは全然社會的言語だ——の場合なごにエゴイズムが屢々現はれることは明白なことであるが、私はその反對に集團的獨り言、即ち言語上の自己中心の形式の中に於て、

利他的感情が現はれることが屢々起るや否やと云ふことに興味を感じた。學齡前の幼兒の言語に於ける自己中心的表現の百分率に就いては、エルザ、ケオーレルはピアジェが認定せるものより遙かに低く評定したが、エルザ、ケオーレルは本年度のハンブルク心理學者會議の席で「學齡前幼兒の全體活動に對する言語の寄與」なる講演中で、ピアジェの結論に對して、ウィーンの幼稚園で得た廣範な實例を基礎として言及し、兩者間の調査結果の相違は、夫々兩者によつて觀察された幼兒に及ぼしてゐた夫々異つた環境の影響による旨を述べ、環境としてのウィーンの幼稚園とピアジェの Maison der Petits (子供の家)を比較し、この子供の家ではモンテソリーの子供の家に於けると同様、可成極端な無口が支配してゐる事が、其處の子供が會話よりも獨り言をより多く話す因となつてゐるのだと説明した。

我々の當園はこれ等の結論につき論議すべき組織立つた調査はなし得なかつたが、それに就いて他の多くの幼稚園、子供の家で、かゝる記録がもたらされることを衷心希望するものである。當園は數年來特別の形式で幼兒の日常の

遊具選擇を記入した遊具記入簿と共に、注目に價する觀察を直ちに記入しておく一つの記録帳を備へ取扱つて來た。

此記録帳を私はこゝで頁を繰つて、勿論當園が自發的な獨り言に對する機會を幼兒に與へてゐるのではあつたが、然し、こもかく此言語上の自己中心が、幼兒の社會體への漸進的參與及び社會關係の漸次自覺を伴つてゐる事を證左する言語表現を僅少なこの記録帳の中から可成に發見した。

當園で幾度も觀察された獨り言は大抵は仕事に伴つてゐる。さて幼兒ミ云ふものは自分自身を先へ先へこあふり立てゝ行くか、或ひは自分の希望通りになるやうに物に向つて心から勧告する。

ミカエル。二年七ヶ月。木製立體で高塔を積上げたが、小さい立體の上へ大きいのを重ねたので、それは壊れてしまつた。

又やり直して兩手で一生懸命その立體をおさへ重ねて行きながら繰返し叫んだ。「倒れないやうに、ほら、しつかり立つて!!」と。

エルヴィン。三年四ヶ月。長梯積木で塔を作つてゐた。五つづつの積木で二組の塔を作つた。それが奇麗に見えたので大得意で、喜びのあまり喋りつづけた。「これは倒れやしないぞ。ちやんと倒れないやうに僕わかつてゐるんだよ」。

フリッツ。四年六ヶ月。圓柱積木をすつかり引き抜き出して、ちつと考へてゐたが、その穴を指で順々に輕くさわつて行きながら低聲で「一、二、三、……と十まで數へては又、幾度もそれを繰返して數へてゐた。

マルギイト。二年十ヶ月。描きながつてゐたが、その際、いつも小聲で獨り言を云つてゐた。「描いてゐます。描いてます。描いてます」。

以上の如き普通の獨り言の外、集團的獨り言も發見される。

エルヴィン。五年二ヶ月。ウルセルが一枚の繪の下敷をも持つてゐるのを見て、一つをウルセルに持つて行き、そして皆の方に、向つて、云つた。「ウルセルさんは下敷がないので、僕一つあげたんだよ」。

ローゼロツテ。四年三ヶ月。(誰に話しかけるでもなく。「呼鈴が鳴つてゐるわ。誰も扉開けに行かないのかしら」。それから一寸經つて。「さあ、いよいよ、この黄色い着物のお嬢ちやまが立つて行かないや、なりません。(扉を開けに行く)。それからすぐ、一つの答をも期待せずに尋れた。「でも、今に未だ誰か外の人たちも開けに來るんじゃないかしら」。

フリーゴー。五年四ヶ月。珠數繫ぎ組で遊んでゐたが、私(ケーテ)の方を振返りもせずに云つた。「ケーテ先生、何故こゝのお部屋がこんなに大きいのか、今判つたの。この珠數繫ぎ組のためでせう。僕んとこのお部屋ぢや。きつとこんな長い長い紐は入り切れないや」。

新入の幼児が母を追つて泣いたので、皆はこゝは子供達ばかりでお母様方は居るものぢやないの)のだと云つてなぐさめた。「若し、貴君が何かしてもらひたいことがあるなら、私はこゝにゐますから、何でも仰言ひ」と私が付加へた。その時奥の方でミカエル。四年四ヶ月。は此方へ見向きもせず、相變らず繪を描きつづけて行きながら云つた。「そうか、そんならいゝや。ね。そうだらう」。

保姆Aが一寸暫らくの間他家へ預けられてゐたレナーテに、もう自宅へ歸つてゐるかどうかなたづねた時。ギユンテル、五年六ヶ月、が口を挟んだ。「レナーテさん、そのニコニコ顔で、君がもう自分の家にゐること誰にだつてわかるさ」と、それつ切り、その會話には加はらないで。

以上の獨り言に對立させるために遊具遊びの際に云はれた言語の中からその斷片である二三の會話の例を擧げて見

やう。これ等は「社會に對して向けられた表現」、即ち競争意識並びに承認、感情移入を表明する處のものである。最初に競争意識を證明する會話を引用すれば、

クリステルとリロとが繪を描いてゐる。ク「君、昨日僕何處へ行つたか知つてるかい。——シャイトニツヒへ行つて來たんだぞ。」レ「僕なんか、百べんも行つたことあら。」ク「僕だつて、千べんも萬べんも行つたんだ」。

ベアトリツエとサビイネ。ベ「私はこの間からの咳が未だ癒らないの。」サ「病氣になつた時、貴女どうなつたの。ねえ、一體どんな風になるの。」ベ「咳や鼻水が出るんだわ。」サ「私も咳や鼻水出るわ。私の方がずつと澤山咳や鼻水が出ることよ。」ベ「うそよ。私の方がそれよかもつと餘計に鼻水が出てよ」。

エス、フリッツとサビイネ。フ「君、ローマ數字を知つてるか。」サ「ローマ數字つて一體なあに。」フは得意に微笑して「君未だ知らないのかなあ。」サ「でも私なんか、A B CのAの字知つてゐるわ」。

エル、フリッツとステファン。(汽船に關する長い談話の間で)ス「でも僕がお父さんと乗つたのは川蒸氣ぢやなかつたんだ。」エ「ブラーグには好い大きな汽船があるよ。」ス「プレスラ

ウにだつて大きな汽船あるとも。僕なんか君、あのね、ステチンへだつて行つたことあるんだぞ」。エ「そりやプレスラウにも大きな汽船あるけどれ。ブラーグにはとても大きな汽船があるんだ。——ブラーグの汽船はそりやすてきに大きいんだ。君なんかには考へきれない程大きいんだぞ。ブラーグの汽船と云へば、どんだけ大きいか大きさがわからない位大きいんだ」。(他の幼児達が言葉を挟み出して、その談話は先へ進められた。)

以上の會話に於て、それが體驗に關するこゝであれ、自己の行爲に關するこゝであれ、たゞ法外に高昇させて行くこゝの喜びが認められる。次に優越に際して妥協的な利他的な調子のもを挙げれば、

レナーテとシルビヤ。(保姆Eが新しい色鉛筆を持つて來た。シルビヤはそれがどう云ふ風に包まれてゐたかをちつと見てゐた。レナーテがすでに登園の途中でそれを見せて貰つてゐたことをシルビヤは知らない。)レ「私が一番初めにこの色鉛筆見たんですれ」。レ「ちがふわ、E先生、私に一番初めにこゝで見せてくれたんですれ」。保「先生は今朝こゝへ來る途中でレナーテさんと一緒になつたので、その時、この色鉛筆はレナーテさんが一番初めに見たのです」。レ「そら、ね、私が一番初めてせ

う。え、私が一番初めの又その一番初めに見たの。そしてシルビヤさんはたゞ、一番初めに見たのね」。

ブーゼル。(マリアンチの机のそこを行き過ぎながら)「ほら見てごらん。この子の描いてるのがどんなだか。少し線からはみ出じちやつてるぢやないか。……でも、外のとこは、とても立派に出來てるけど」。

ルーディ。(一枚の大層上手な繪を持つて來て)「これどう、上手だらう」。(彼は非常な賞讃を博した。するとちつと優越感を抑へて、「僕、これ一寸だけど、シルビヤさんの繪を眞似して描いたとこあるのさ」。

サビイチ。(周圍にゐる子供達の繪を見比べて)「こんな年の小さいわりにはペーテルさんの繪が一番うまいわ」。(ペーテルは滿三年にならぬ子である)。

フーゴー。(四年三ヶ月のフリッツの繪の前に批評しながら)「僕が若しこれ描いたなら、こんなの描ないけど、君が描いたんだから、それにしちやとてもうまいよ」。

ブーゼル。(平衡遊びの際、當年滿三年のサビイチが普通は大きい子供達だけが試みるやうな重い大梯積木を兩手に取上げる<sup>R</sup>のを助手として見てゐたが、皆の方に叫んだ。)「どうぞ、皆騒が

ないやうに、サビイチちゃん邪覺にならないやうに。こんな小さいのあれをやつて見てゐるんだから」。

ズーセル。(上と同じやうな場合、小さい子供が皿の平衡遊びをしやうとするのに向つて)「若しかして皿が壊れてしまつても、君ならちつとも構はないんだから、安心しておやりよ」。

(やり損じて小さい故、無理ないとの意で)。

慣れた古い幼児達に取つては新入の幼児をいたはるこゝが又特別の喜びである。この場合も又、新入の年嵩の子供には新入の年の小さい子供にさは違つた玩具を與へたりするやうなデリケートな感情移入能力が見受けられた。

ヘルガ。(未だ満二年にならぬペーテルを何くれといたわつてゐたが、或時、ペーテルが音楽の時間に、參觀席の腰掛によち登らうとしてゐるのを見て、ヘルガは自身のためではいまだかつて敢て出し得なかつた程の大聲で部屋一杯に遠くから叫んだ)。「エリカ先生、どうかペーテルさんに手傳つてやつて頂戴。

私ちや、あの子持ち上げられないんです」。

スザンチ。(ハンナにリボン結びを説明してゐる)、「ほら、よく聽いてらつしやい、そつちの手へ黄色いリボンを持つて、こつちの手へ緑色のリボンなれ。ほらさあ」。ハンナは見向きも

しないし、注意もしない。ス「ハンナちゃん、ハンナちゃんたら、ほら、よくこの兩方のリボンを見て、なぜ、こつち見ないの、さあ」。ハンナはまるで注意せず、外の子供達の方に氣を取られてゐる。スザンチ、はちつと忍耐して自分でそのリボンを結んでから、その板をわきへ片付けて、ス「ちや、今日は貴女は教はりたくないのね」。「ちや、今度にしませうね」。

サビイチ(クリステルに描き方を教へて)。サ「それぢや駄目、私が教へてあげませう。その枠の外へはみ出ないやうに書きなさいね。わかつた。クリステル、(おづおづと二三度筆を動かした後)「これでいゝの」。サ「いゝえ、未だ駄目だわ、も一度數へてあげませう。こゝは皆、綠色に塗るんですよ、はみ出さないやうによ。そして、こゝんとこは黄色に、そこは赤くね。そしてこゝは青く」。その時、お黙りの時間になる合圖が告げられた。サビイチは劇しく叫んだ。サ「未だお黙りの時間にしちゃ駄目です。だつて、クリスちゃんは未だ出來上らないのです」。

(こゝに注目すべきは、サビイチは是迄の斯様なお黙りの時間になる合圖の際に、やりかけてゐた仕事の爲に未だ會つて待つて下さいなご自分の爲に申し出たこゝはなく、絶對、斷乎しした態度で仕事を中止してゐたこゝである)。

目覺めつゝある社會感情を確立せしむべき場合の最も困難なる問題は手放すこと云ふことである。されば色鉛筆の貸借云ふこと、即ち自分が折角選んだ鉛筆のその色を他の子供が用ひたく思ふ場合には、この貸借云ふことが一つの特別の役割を演ずる。同様に繪型枠も、それは各自が繪型枠二個と色鉛筆五本づゝ選び取つてよろしい云ふいきたりになつてゐるので、夫を一度幼児が自己の机の上に持つて來てしまふと、恰かも自己の私有物の様に思つてしまつてゐる故に、かうした時の繪型枠も又然りである。

エバ。ビィツエ。ペーテル。(ペーテルは二人のそこへ來て、枠を一つ貸してくれと願ふ)。エ「駄目。私は未だ使つてゐるんですもの。ビィツエが直ちに一つの枠をペーテルに貸與へる。ペーテル嬉しうに。ペ「ほんとに君親切だね」。

レナーテとシルビヤ。レナーテは部屋を横切つてはシルビヤのところへ色鉛筆を借りに來る。そのたびに、改めて、丁寧に貸してくれるやうにたのむ。

シルビヤ(レナーテを後から呼びとめて)「もう聞きに來なくても大丈夫よ、きつと貸してあげるわ」。

クラウディア。子供等は庭で栗拾ひをした。クラウディアは

特に澤山拾つたが、保母が他の子供にも少し分け與へるやうに云つて聞かせたけれど始めはそれに應じなかつた。けれど引上げて來る途で突然クラウディアは一つづつ、自分のポケットから栗を出して、夫を小さいエルビンのエプロンの中へ押込んだ。保母R「少しは貴女の方も取つておきなさいな」。ク「いゝえ、もう私一つも要らないの。私どんどん此小さい人にあげてしまふわ」。(そしてすつかり與へてしまつた後、クラウディアは兩手を高くあげて)「でも私まだゼロだけ栗を持つてゐるんですわ」。天性内氣な幼児達が遊具遊びの間に初めは自分獨り切りで遊んでゐるが、終ひには獨り切りぢやない方の氣持よさが判つて、獨り切りで遊ぶことが段々少なくなつて行くことは、よく有る例である。私はかゝる瞑想的な態度をも充分理解することが出来る。そして満五歳になつてもなほ他の子供とはつき合へずにある幼児が、すつと獨り切りで遊んでゐるが、一度誰か他の幼児と近付きになると、實は既に社會感情も充分目覺めてゐて、天から降つて來たやうに特に鋭い感情移入を示す例も少なくない。それ故に、言語的に自分の殻から脱出することが出来るやうに各々の幼児に或る刺激が與へられねばならないことに例外なしに必要

なここだと思はれる。されば當園では、遊具遊びの後に前日の凡ゆる経験が語り合はれる機會が提供されるやうに午前のお八つの時間を決して缺かしたここはない。保姆も共にまざつて語り、保育上重要な例を窮屈でなく折を見て口を挟み、そして若し保姆が彼等の會話を傍で聽いてゐれば、自分に信頼して来る幼兒を殊に早く知り得るのである。遊具遊びの時間を長く取る必要からこの共同お八つを廢止するここは我々には邪道に考へられる。何故なら我々の経験に依れば各自の自由作業に對しては一時間半もあれば充分事足りるのである。當園ではこのお八つの後に、或ひは折紙、或ひは粘土細工、或ひは共同作業の幾つかのゲームが出来るのである、そして當園の毎日の第一段階は平靜を旨とした會集であり、その會集は獨り言から次第に近隣の幼兒との低聲な會話になつて行つて終るのである。その次にこんごは長い會話の時間であるお八つの時間が来る。前掲の幼兒の會話も要するに他の幼稚園でもかゝる言語表現を記録するここが行はれんここを希望して述べたわけ、當園ではこの記録は、かのカツ氏の著「幼兒の會

話」も同様に充分利用されてゐる。例へば當園の月々の母の會はこの日誌によつて、この幼稚園なる社會内に於ける幼兒の態度に對する深い理解を兩親達に便ならしめてゐる。

自由選擇の活動の平和的雰圍氣が各幼兒に落付き平安にシテムに反對な側からも漸次容認されて來てゐるここだ。自由選擇の活動の平和的雰圍氣が各幼兒に落付き平安にシテムに反對な側からも漸次容認されて來てゐるここだ。要するに私の切言したい點は、幼稚園に於ては、幼兒間の友好的關係が、各自の細心な遊具遊びも同程度に價値あると同じく、幼稚園に於ては、モノローグ（獨り言）もディアローグ（會話）も同じ程度に屢々登場するこ云ふ事實、及び、この幼兒の言語發現の二通りのものから強い社會感情の發展も云ふここが推理し得る事實である。幼兒の發達の各段階に於てその自由は成長を保護すべし云ふ、彼の保育原理を忠實に守らんとする幼稚園ならば、三歳から四歳の幼兒の自己中心的表現に——幼兒がそれの中で、別段特定な相手に了解を願ふ必要もなく、自己自身も或ひは世界と語り合つてゐる處の、その自己中心的表現に——場所を與へなければならぬであらう。（了）